



Title	スウィフトのプライド観(III) : 「スウィフト家の隠された逸話」
Author(s)	渡辺, 孔二
Citation	Osaka Literary Review. 1965, 3, p. 55-62
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25784">https://doi.org/10.18910/25784</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## スヴィフトのプライド観(Ⅲ) —「スヴィフト家の隠れた逸話」—

渡辺孔二

スヴィフトのプライド観を調べていく上で、どうしてもスヴィフト自身のプライドを調べておかなければならない。今回はスヴィフトのプライドを暗示さす一例として、スヴィフトが自分の生まれるまでのスヴィフト家について、どのように語っているかを見てみよう。彼自身が自らを第三人人称の形で語っている「スヴィフト家の隠れた逸話」①を中心にして論じてみる。

— ○ —

彼の語るところによるとスヴィフト家は「ヨークシャー」の「旧家」であった。まずここで二つのことに注目しておこう。

第一は、生涯、英国とアイルランドを往来したスヴィフトにとって自らの祖先が英國北東部の出身であったということがどういう意味を有しているかということである。スヴィフトの往来した土地を略記してみると次の通りである。

ダブリン（1667年ゴドウィン家で誕生） → ホワイトヘヴン（1才） → ダブリン（3才） → レスター（22才） → ムア・パーク（22才） → キルルート（28才） → ロンドン（32才） → ダブリン（33才） → ロンドン（40才） → ダブリン（46才）  
……ダブリンで死亡（78才）。

これをみてもわかるように、スヴィフトは英國とアイルランドを往来している。彼の生涯からみると、アイルランドのダブリンが彼の故郷のようであるが、彼の心の故郷はアイルランドなのであろうか。彼が「ヨークシャー」というとき、彼の脳裡には、彼の過したアイルランドの姿の上に、英國の姿がおおいにぶさっていた、否、むしろ、ヨークシャーを、英國

を、彼の故郷であると彼自らに必死で認識させようとしていた、とはいえないであろうか。そのことは第二の問題点に関連してくる。即ち、「旧家」と彼がいう場合、その旧家というのは、アイルランドの旧家を意味しているのではない。英國の、それもヨークシャーというはっきりした土地の旧家を意味しているのである。これらのことになります着目しておく必要がある。この二点に注目して、次に進もう。

このヨークシャーの旧家であるスヴィフト家から、まず、一人の著名な人が出た。彼はキャヴァリエロ・スヴィフトといった。彼はどんな人だったのか、スヴィフトの語るところに耳をかしてみよう。

彼は「ウィットとヒューモアのある人」であった。そして、彼は「ジェイムズ王或いはチャールズ1世によってアイルランド貴族にしてもらい、カーリングフォード男爵の称号を与えられた」。しかも不思議なことに「アイルランドには一度も住んだことがなかった」。今、私は「不思議なことに」という言葉を付け加えたが、なぜ、スヴィフトはアイルランド貴族であるキャヴァリエロがアイルランドに住んだことがないというのだろう。このことは、前に述べたスヴィフトの心の故郷が英國であったのではないかということに関連があるが、ここではこのままにして前へ進もう。

キャヴァリエロは男子の相続人を残さずに死んだ。スヴィフトが次に述べているのは、キャヴァリエロの娘或は孫娘がロバート・フィールディングという人と結婚したことである。このフィールディングについてスヴィフトが述べていることは、彼が美男子であったということと、彼の妻の相当額の持参金を使い果たし、しかも彼には子供がなかった、ということである。そして、このフィールディングという人は、スヴィフトに、スヴィフト家のもう一人別の女子の相続人がエグリントン伯爵と結婚した、と述べたと書いている。

〔今、「スヴィフトに」と述べたが、より正確には「作者に」と述べた方がよい。というのは、この文は「作者」という仮面をかぶつた彼の書いたものであり、その仮面をはずしてしまうと、自らを「彼」と書いている彼の表現の客観性がうすれてしまうからである。しかし、ここでは、あえて「作者」を「スヴィフト」として論じていく。彼のプライドにより接近したいためである。〕

又、スヴィフト家にはサー・エドワード・スヴィフトという、これ又、

当代では、よく知られた人がいたが、彼に相続人がいたかどうかは確かにではないと述べている。

このあたりまでのスヴィフト家の家系は、はっきりしていない。唯、スヴィフトは、このあたりまで、即ち、16世紀の中頃までのスヴィフト家については漠然と述べているにすぎない。しかも、かなり「はっきり」と漠然と浮かび上るスヴィフト家の人々をほめている。

では、スヴィフト家は、どのあたりから、はっきりアイルランドに居を構えたのだろうか。

アイルランドに居を構えたスヴィフト家の元祖はウイリアム・スヴィフトだった。それはエリザベス女王時代末期からジェイムズ1世の統治の時代であったらしい。

さて、例によって、スヴィフトはウイリアムのことをどう述べているかみてみよう。彼はカンタベリーのブリベンダリーをしていたこともあったし、又、非常に「高名な牧師」で、説教集もこしらえた。又、ウイリアムはフィルポット（ヨークシャーのゼントルマン）の娘と結婚し、その娘（メアリーという名で、1626年に58才で亡くなっている。スヴィフトの曾祖母にあたる。）が持っていた持参金には、全然手を触れることは出来なかった男だった。持参金は曾祖母が保管したままだったらしい。

さて、このウイリアムの妻、即ち、スヴィフトの曾祖母のことを、スヴィフトは「気まぐれで、性の悪い、おまけに、怒り易い婦人」だったと述べている。

ここで気がつくことは、スヴィフト家の家系の中で浮かび上の前述の人物とは対照的に、メアリーのことを、あまりよく述べていないという事実である。なぜか。そのことを理解するには、メアリーの一人息子であり、スヴィフトにとっては祖父にあたるトーマス・スヴィフトのことに触れねばならないが、結論から先に述べれば、スヴィフトが祖父トーマスを愛する比重の重さの故に、曾祖母メアリーへの描写は犠牲になっているということである。表面上は、メアリーが、祖父トーマスを、少年の頃、リンゴを一つ盗んだという理由で勘当してしまったからであるが、しかし、ここで想いをめぐらせば、スヴィフトがメアリーを、そのことを根にもって、非難していると取るのはあたらない。リンゴ一つを盗むということが法律で

は大した罪にならなくとも、道徳的にゆるしがたいことであるのは、スヴィフトにとっては、理屈ではなく本能的に、あるいはむしろ体質的に、直観的にうなづけることであり、そのことを根にもっていたわけではない。そのことは、例えば、スヴィフトがあの有名な「ドレピアーニ事件」のとき、英國政府が必死になって、ドレピアーニ書簡の筆者を賞金300ポンドも出してさがしていたとき、その作者がスヴィフトであることを知っていた唯一の人である彼の召使頭を、酒を飲んで外泊した、即ち、召使頭にあるまじき行為をした、という理由で解雇してしまった一事をみてもわかる。（ここで念のためにいっておくが、あとで、スヴィフトはその召使頭を、又、もとどおりに復職したのみならず、本山の役僧にまでしてやった。スヴィフトとはそんな人である。②）

スヴィフトがメアリーのことを良くいっていないのは、前にも述べた通り、トーマスと比較対照さすための一つの相対的な表現に過ぎない。

さて、そのトーマスのことについて移ろう。

スヴィフトがトーマスのことを述べる場合、スヴィフトの目は生き生きと輝いていたにちがいない。得意満面のスヴィフトの顔は、彼がトーマスについて述べている一字一句を見れば瞭然である。まずその理由を述べておこう。一つはスヴィフト家の他の人々（スヴィフトの父、母、叔父を含めて）を述べているスペースに比べて、トーマスへの描写がとびぬけて多いこと、第二はその述べ方が、ほとんどトーマスのエピソードでしめられていることである。〔「スヴィフト家の隠れた逸話」の中でエピソードらしきものは、トーマス以外の人々に関しては皆無である。〕

このトーマスへの描写にいたって、スヴィフト家の血統は、誇らしげに、スヴィフト自らに認識されているのがわかる。

トーマスはメアリーに勘当されたにもかかわらず、父ウイリアムのあとを継いで牧師になった。彼はヘレフォードシャーのグッドリッチの教区牧師であったが、又、別に一年約100ポンドの寺禄も有し、グッドリッチ村に自分の家も建てた。ここまでは普通の牧師と大差ないのであるが、それからの波乱に富んだ生涯がスヴィフトにはたまらない魅力であったらしい。トーマスの生きた時代は、あのチャールズ1世と議会派の争いの最中であった。

スヴィフトは得意な面持ちで述べている。「彼（トーマス）は英國のどん

な牧師よりも、チャールズ1世への忠誠を誓い、チャールズ1世を救うために幾多の苦難を乗り越えた、勇気ある人であった。」

トーマスについて述べているエピソードに耳をかしてみよう。

### 1. 幾多の苦難を乗り越えてチャールズ1世にお金を献上した話。

トーマスには子供が10人もいた。おまけに、議会派の人々に36回も略奪された。（スウィフトは、ある者は50回以上だともいっている、と正確な回数にまで言及している。）にもかかわらず、トーマスはチャールズ1世にお金を献上しようとした。そのお金を持ち出す方法も、トーマスの苦難のあとがうかがえるような奇抜なやり方だった。トーマスは彼の有り金全部を、彼のいつも着ているチョッキの中に縫い込んだ。そしてそれを町へ着て行き、彼のよく知っている総督のところへ行った。総督は「君はチャールズ1世に何をしてあげるのだ。」とトーマスに言った。トーマスはすかさず着ていたチョッキを脱いで「これを差し上げます」といったのだが、総督はチョッキなど取るに足らないといったような顔をしたのでトーマスは「私のチョッキを手に取って重さを計ってみて下さい」といった。総督がそのチョッキを引き裂いてみると、その中には一面にお金が入っていた、というエピソード。

### 2. トーマスの勇気と頭の良さをあらわしているもう一つのエピソード。

ある時、300頭の馬を連ねた反逆者の一団が王党派の人々を襲おうと、ある川を一週間以内に渡って来るということをトーマスは聞いた。トーマスは一案を計画した。それは先端のとがった三つの長釘のある鉄の板を作って、それを夜のうちにその川の浅瀬におくということだった。トーマスは翌朝早くその反逆人の一団がその浅瀬を渡って来ると計算したからだった。案の定、その一団は翌朝、そこを通った。そしてその一団のうち、200人はおぼれたり、馬から落ちて馬に踏まれて死んだり、そのトーマスの作った長釘にささって死んだりした、というエピソード。

このようなエピソードの持主であるトーマスは63才で死んだ。トーマスの墓には短い碑文があり、それはグッドリッチの教会にあるそうである。そして、トーマスはチャールズ1世への忠誠の故に、チャールズ2世の即位後は教会での地位を約束されていたのだが、トーマスは、やんぬるかな、チャールズ2世即位の2年前に死んだので、それも駄目になったと

のことである。

これまで、スウィフトがスウィフト家について述べていることを要約してみると、スウィフト家が英國の旧家であり、スウィフト家にはトマスを筆頭にして、卓越した人物がいたということである。なぜ、スウィフトは、例えば、トマスのような人物を敬愛し、スウィフト家が英國の旧家であったということを強調したいのだろうか。

単純に考えれば、スウィフトはスウィフト家の血統というものを自慢したかったに相違ない。しかし、今一度、スウィフトの生涯を考えてみると、スウィフトが彼の家の血統を自慢しているということは単純な意味を通り越して複雑な意味を有して来る。

スウィフト家が英國の出身であるということ、そして又旧家であるということ、さらにスウィフト家には卓越した人物がいたということは、スウィフトにとっては、どうしても公言しておかなければならない、否、むしろ自分にいいきかせていなければならぬ、心のよりどころであったのではなかろうか。

スウィフトの父、ジョナサンは叔父ゴドウィンの世話をになった。しかも結婚二年足らずで二児（ジェインとスウィフト）を残して死んだ。そして母親アビゲイルはゴドウィンの世話になった後、細々とジョナサンの年金20ポンドで郷里レスターで暮していた。

そしてスウィフト自身は、この世に生まれ出る7カ月前に父を亡くした孤児として、しかも自分の家ではなく、ゴドウィンの家で生れ、しかも英國にあらずしてアイルランドで生まれた。そして、その生まれた教区である聖ワーバーグ教区には出生届さえもないといわれている。<sup>⑧</sup> 又、生まれてまだ母親の顔もはっきりおぼえていない時期を、母親のもとにあらずして乳母のもとで大きくなり、しかも母親とは、生涯ほとんど一緒に暮したことのない（3才でゴドウィン家にいる母のもとに帰ったのも束の間、母は郷里レスターへ、スウィフトを残して帰った。その後スウィフトが母と暮したのは、スウィフトがサー・ウイリアム・テンブルのもとで働く少し前、即ち、1688年の革命でダブリンが混乱におちいり、母のいるレスターへ逃れた、ほんのわずかな時期を除くと、ほとんどスウィフトは母と一緒に暮していない。）スウィフトにとって、又、父なきあと、大学を卒業するまでの間、叔父ゴドウィンの世話をになったスウィフトにとって、しか

も、始終、心の平静を求めていたスウィフトにとって①、スウィフトが心のよりどころとしたのは、スウィフトの心に描く、過去のスウィフト家の、英國の旧家という、どっしり落ち着いた心の故郷であり、しかも、その旧家から輩出した、他人にひけをとらぬ先祖の姿であったのではないか。

「スウィフト家の隠れた逸話」を読むと、そうしたスウィフトの心のよりどころがスウィフト家という過去の、しかも現実に自分の血潮に流れ込んでいる、血統に対するイメージにあった、という感を深くする。

血統に関して今一つ、述べておくと、スウィフトは、彼の母アビゲイルの家柄に関して、非常に高く評価していることがわかるが、ここではそれは割愛することにする。（一説にはアビゲイルは肉屋の娘であった⑤とのことであるが、スウィフトは、アビゲイルは、かの有名な征服者ワイリアムの率いる軍隊の指揮官になった、エリックの子孫であると述べている。）

過去の幻影を心のよりどころとすることは、考え方によればむなしいものであるにちがいない。しかし、そのむなしさこそがスウィフトのプライドの根拠となっていたことは、間違いないことであろう。そのむなしさは人間のプライドと表裏の関係にあるむなしさであり、一方では、人間のプライドにまつわりつく、現実の身から離れ過ぎているむなしさであり、又、他方では、現実の身を現実によりそわすプライドの根源力ででもあるといえよう。



[注]

① *Anecdotes of the Family of Swift, Swift's Works*, (ed. John Nichols, London, 1801) Vol. I. PP. 518~529.

② 漱石全集第12巻「文学評論」（漱石全集刊行会、昭和11年）pp, 274~277 にその時のいきさつが述べられている。

③ *The Conjured Spirit Swift* (Evelyn Hardy, London, 1949)  
p. 16

④ スウィフトのジョン・ケンダル氏への手紙（1691-2年2月11日付）参考のこと。

*Swift's Works*, Vol. II. pp. 1~4

62

⑤ Evelyn Hardy, p. 11